学会等助成報告

第4回 日本リハビリテーション医学会 秋季学術集会

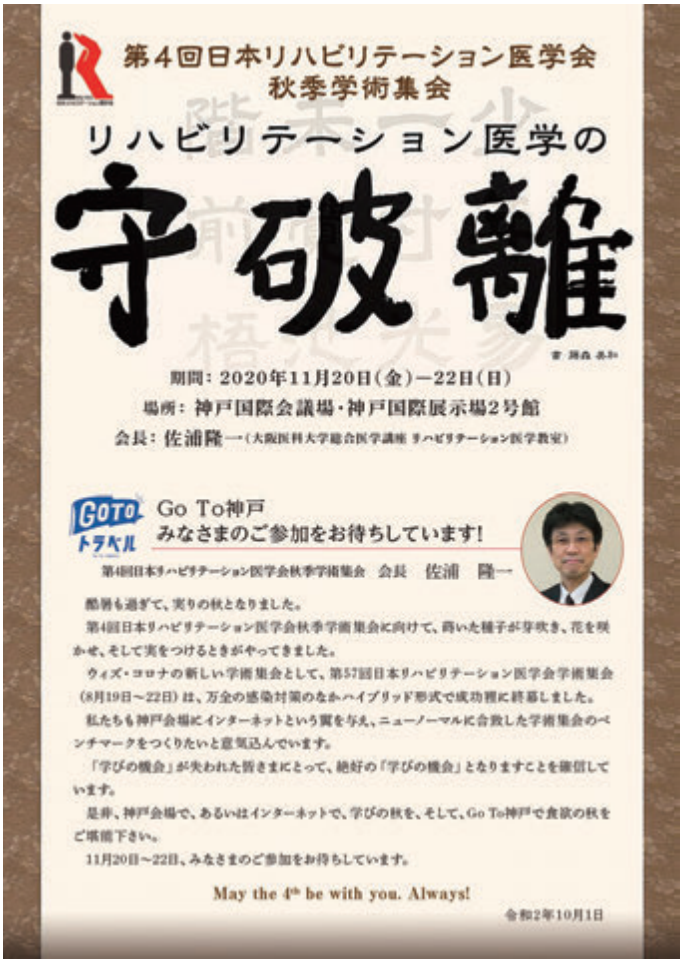
会　　長　佐浦 隆一（大阪医科大学 リハビリテーション医学教室 教授）
事務局長　冨岡 正雄（大阪医科大学 リハビリテーション医学教室 准教授）

第4回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会を2020年11月20日（金）～ 22日（日）の神戸国際展示場／神戸国際会議場での現地開催とインターネットによるライブ配信を組み合わせたハイブリッド形式、および11月30日（月）までの見逃し配信（オンデマンド形式）をもって開催いたしました。2020年に入りパンデミック宣言が出された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の国内第三波が確認され、移動の自粛や感染対策の強化が連日報道される中での学術集会となりました。

学術集会のテーマ「守・破・離」は千利休の訓をまとめた『利休道歌』にある「規矩作法守り尽くして破るとも離るるとても本を忘るな」から引用された言葉です。修業に際し、まずは型を徹底的に「守る」ことで型が備わり、つぎに型を研究することで既存の型を「破る」ことができる。さらなる鍛錬・修業によって型から「離れ」、技の全てに精通するが、「本を忘るな」とあるとおり、「破」・「離」となっても根源の精神を見失ってはならないとの教えであり、リハビリテーション医学・医療にも大いに通じるものがあります。

学術集会のポスターやテーマに用いられた「守・破・離」と「少年易老学難成　一寸光陰不可軽　未覚池塘春草夢　階前梧葉已秋風（観中中諦・青嶂集）」の書は私の患者さんにお願いしました。そして、Star Wars©の決め台詞である“May the Force be with you. Always!（フォースとともにあらんことを!）”と「第4回」を引っかけた「May the 4th be with you. Always!」をキャッチフレーズに学術集会の準備を進めました。

昨今の通信技術、AIなどデジタル技術の進歩によるリハビリテーション医学・医療や日常生活・ヘルスケアのデジタルトランスフォーメーション（保健医療2035）には目を見張るものがあります。そこで、会長講演ではヘルステック・リハビリテーションテックとそこに潜む1984・ビッグブラザーに類するディストピアの



危険性を皮肉を込めて述べさせていただきました。

ハイブリッド形式での開催であり、感染対策のために会場の入場定員を減らしましたが、現地参加者はやはり少なく、どの会場も閑散としていました。しかし、インターネットを介したセッション（講演・シンポジウムなど）ではオンラインでの視聴者が100人を超えるなど、これまでの学術集会の平均的な聴講者数を軽く凌駕しました。また、これまでは会場フロアからの1～2名の質疑応答に限られていましたが、インターネットではコメントや質問がしやすいためか、どのセッションでもインターネットを介してコメントや質問が活発に寄せられ、座長が会場フロアからの質疑を受けつつ、寄せられたコメントや質問を選択して講師に尋ねるなど、より広く参加者が参加した活発な討論が行われました。

今回は感染対策のために現地参加者を制限せざるを得ないがために採用されたハイブリッド形式ではありましたが、それ故、これまでにはなかった数多くの企画を考え、また、工夫を凝らしました。3密を招く会長招宴や懇親会、イブニングセミナーを開催できないので、新たな取り組みである「ナイトセッション」をウェブ配信しました。初日の夜には私がMCとなり、「理事長・学術集会会長合同企画 日本リハビリテーション医学会の明日はどっちだ!」を開催しました。理事長や副理事長、前学術集会会長の意外な素顔に触れ楽しい時間を過ごすことができたと好評を博しました。ソーシャルディスタンスが取りにくいポスターセッションではデジタルポスターを配信し、討論はウェブ会議システムを利用したセッション（オンライン小部屋）で行いました。また、来場できない参加者への展示企業のレポート動画の配信、若手医師やリハビリテーション専門職向けのエキスパートセミナーなど、盛りだくさんの新たな取組みを用意しました。

特別講演1「JR福知山線事故から15年―私たちの軌跡―」での当事者である鈴木順子さんとお母様の言葉一つ一つと特別講演2「分身ロボットOriHimeによる新たな働き方、社会とのつながり方」での吉藤オリィ（健太朗）氏の自身の孤独・孤立体験に基づく、分身ロボット・アバターを使った社会参加・交流の取り組みの紹介は、非常に印象深く、私を含めて多くの聴講者にリハビリテーション医学・医療が「活動を育む医学」であり「社会参加のためのストラテジー」であるという基本中の基本を再認識させてくれたものと思いました。

今回、学術集会の準備を本格的に開始しようとした矢先に組織委員会委員の多くが外出や移動の自粛を余儀なくされ、不慣れなウェブ会議システムを利用した学術集会運営委員会で準備を進めましたが、逆にハイブリッド開催をイメージしたコロナ禍での学術集会プログラムを構築するために活発な議論ができ、不慣れながらも非常に創造的でした。

感染拡大とともに社会情勢は大きく変化しました。運営委員会も次第に緊迫して、テーマである「守・破・離」の意味も「守」は「学びを守る」、「破」は「コロナを破る」、「学術集会の古い慣習を破る」、「離」は「離れたところに学術集会を届ける」という、失われた「学びの

機会」をいかに取り戻すかに変わっていきました。直前まで企画や座長・演者の検討・調整を何度も繰り返す、あわただしい準備状況であり、学術集会期間中はシステムトラブルに見舞われつつも、3日間の全日程を感染者を一人も出すことなく無事に終えることができました。今振り返れば、全てが「新しい学術集会」を生み出すデジタルトランスフォーメーションの過程（産みの苦しみ）であったように思います。

2021年6月10日（木）～ 13日（日）には国立京都国際会館にて第58回リハビリテーション医学会学術集会、2021年11月12日(金)～14日(日)には名古屋国際会議場にて第5回リハビリテーション医学会秋季学術集会が開催予定ですが、その時にはCOVID-19の喪が明けることを心から願っています。

最後になりましたが、学術集会の開催に際し、多大なるご支援を賜りました大阪医科大学医師会の皆様に紙面をお借りして心からお礼申し上げます。また、関係各位と参加された皆様のご健勝を祈念し稿を終えたいと思います。